埼玉会館創立 100 周年記念

埼玉会館エスプラナード展 2026　恢復－KAIFUKU－

SAITAMA HALL Esplanade ART Exhibition 2026　Restoration of Humanity

2026.10/24(Sat)-11/23(Mon)

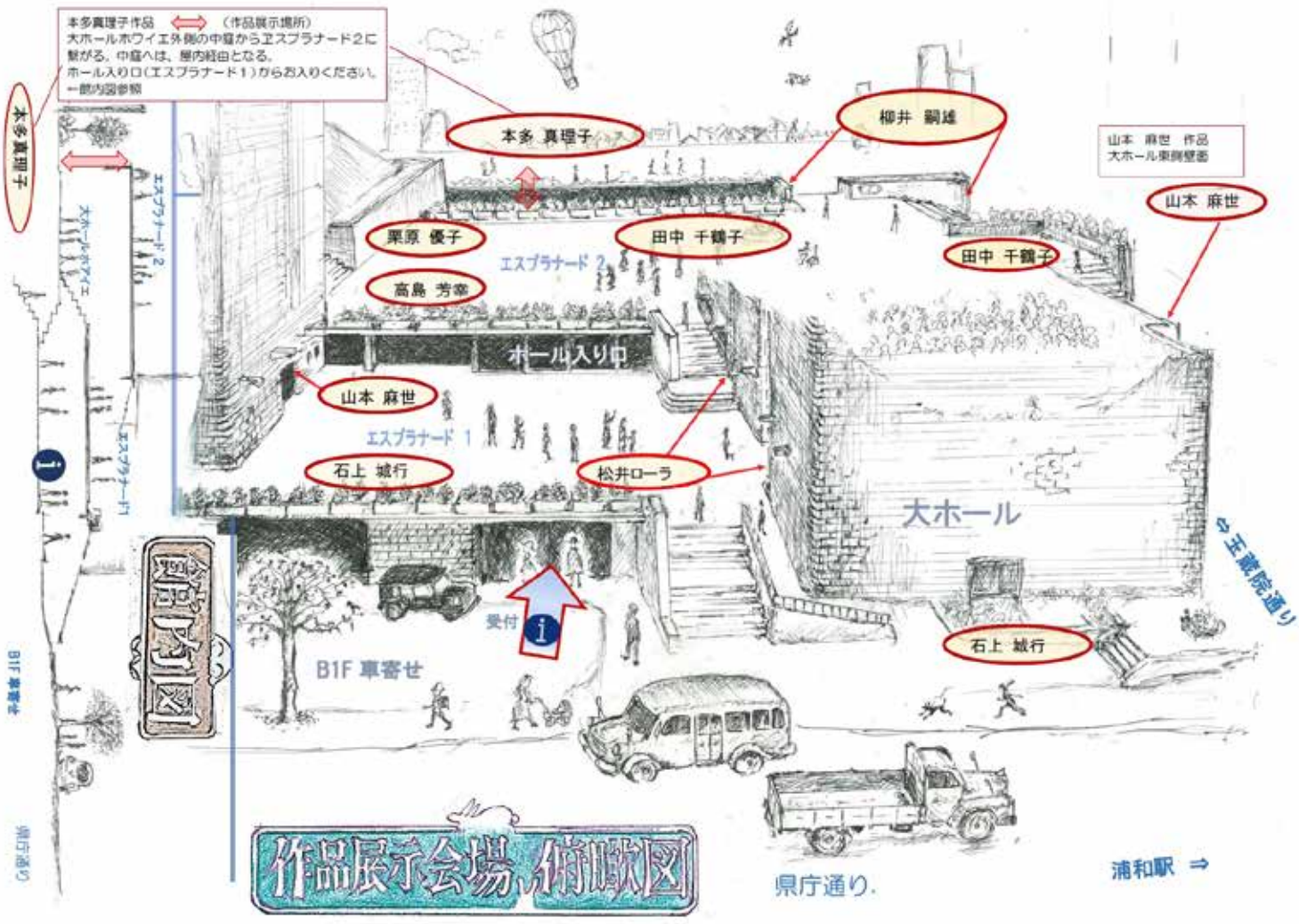
石上城行　栗原優子　高島芳幸　田中千鶴子　細川麻実子　本多真理子　松井ローラ　柳井嗣雄　山本麻世

主催：（公財）埼玉県芸術文化振興財団　企画協力：埼玉会館エスプラナード展 MTG
協力：美術と街巡り・浦和実行委員会
支援：TOKI Art Space（青山）、青山茶舗・楽風（さいたま市浦和区）、制作美術研究所（越谷市）、ぎゃらりー由芽（三鷹市）、アートスペース月光醤油（福島市）、スピリットプロダクツ株式会社（日本橋）、STAND COFFEE コトコト（さいたま市南区）、Gallery DODO（府中）、HONDA Studio（伊奈町）、蘿蔔 RAFUKU 工房（練馬区）

WEB アンケートにご協力ください。

埼玉会館 WEB サイト
www.saf.or.jp/saitama

埼玉会館エスプラナード展
instagram



石上 城行
IWAGAMI Shiroyuki

「記憶の庭　－ガネーシャが泣いている－」

素材：木材（杉、松）

彫刻家。1968 年東京都生まれ、学生時代より人物像や風景などを中心に様々な素材で彫刻作品を制作してきた。主なテーマは「水」「記憶」「時間」「存在と不在」「物語」など、形があるようで無い、無いようである狭間に着目している。最近は形の痕跡を木片で構成することで、一見存在感がありながら虚ろな像を作り続けている。今回はそこに古（いにしえ）の寓話を置いてみた。本作のタイトルは「ガネーシャが泣いている」である。

ガネーシャとはインドの神シヴァと妻パールヴァティーの子とされ、その特徴的な姿には逸話がある。ある日ガネーシャは母パールヴァティーの命令で浴室の見張りをしていた。するとシヴァが浴室に入ろうとする。そのときガネーシャが入室を拒んだためシヴァは激怒し、ガネーシャの首を切り落としてしまった。パールヴァティーの嘆き悲しむ姿を見たシヴァは、そばにいた象の首を切り落としてガネーシャの頭として取り付け、復活させた。結果、今のような姿となったとされている。
後にガネーシャはあらゆる障壁を取り除き成功と幸運をもたらす神とされ、その姿は富と繁栄の象徴として多くの人々に崇められてきた。そのガネーシャが肩を落として泣いている。この事実を私たちはどう受け止めればよいのだろう。作者としてはそこに見る者（鑑賞者）にとっての新たな物語が紡がれることを期待して止まない。

栗原 優子
KURIHARA Yuko

「aftergrow」

素材：大理石

東京都在住、彫刻家。
石を主な素材として扱い、大型作品やインスタレーション作品を個展や野外展で発表している。

aftergrow

そう
それはながれるひかり
ぞう
きえるりんかく　みえるひとつの線

あるく地平　かぞえてみれば
なぞってみれば　のぞむ彼方

高島 芳幸
TAKASHIMA Yoshiyuki

「関係 Oct.2026 in 埼玉会館エスプラナード
－エスプラナードにシカクをカク／あるいは色を注ス－」

素材：彩色合板・シリコンラッカー、石膏ボード、溶岩レンガ
サイズ：約 500×500cm(可変)　　制作年：2026 年

1953 年　茨城県生まれ
1980 年代より、真木・田村画廊（東京／ 1988 ～ 1999）やギャラリー現（東京／ 2001 ～ 2017）、トキ・アートスペース（2020 , 2022 ／東京）、SPC ギャラリー（東京／ 2003 ～ 2026）を中心に作品を発表。
絵画の成立する基本的な要素を、見ることと描くという行為から絵画を捉え直す作品を発表する。
並行して、野外や日常的な生活空間を風土・歴史も含めた「場」として、視覚と行為を基に確認していくインスタレーションを制作している。

前川建築はモダニズムの理知と機能を持ちながらどこか人間的な温もりを感じさせます。それは建築のデザインや構造だけにとどまらず、内部に施される色彩についても知的でありながら人の感覚に添うようにして、空間に配色されています。例えば、建築内の壁の一部や隙間に差し色として赤やブルー、紫系の色が塗られていますが、それら空間に置かれた色は、あくまでも前面に出てくる色ではなく、空間に僅かな響きをのこしながら静かに浸食していく色／配色なのです。
今回の作品は、建築の敷地と屋外に広がるエスプラナードの中央に、建築と絵画の基本形でもある矩形を見立て、そこに建築内部の色に呼応した色を注ス仕事です。前川建築の内部を想像しながら、エスプラナードの空間を楽しんでください。

田中 千鶴子
TANAKA Chizuko

「蜃気楼」

人生一回りを超えて、こんにちの地球のこと、社会現象、自己の人生をオーバーラップして、戦後の食糧難、大戦を振り返る人々の声、経済や風俗のこと、ずいぶん変わった。
小さい時近所のおじさんが、「大陸に戦争に行った時、日本刀で人を切った、その時の音が耳に焼き付いているんだ」それは私が洗濯後のタオルを洗濯機から出して両手で力いっぱい払ったときに、そのおじさんが言った、それ以来わたしは絞った洗濯物を皺伸ばしのためにやるはらい、ができなくなった。

東京藝術大学 鋳金科 卒業
2001「鋳鉄の形 IRON WORKS」展
（御茶の水画廊／東京）
2015 個展「鋳鉄、大地と手」
（川口市立アートギャラリー・アトリア / 埼玉）
2016「かがわ・山なみ芸術祭 2016」（香川、18、22）
2019 1100 年の編み手たち一流動する日本の近現代美術一」展（東京都現代美術館／東京）
2020 さいたま国際芸術祭 市民プロジェクト
エスプラナード展 2020（埼玉会館／埼玉）
2021 リニューアル展 屋外彫刻、鋳鉄作品
（せきがはら人間村生活美術館 / 岐阜）
2023 個展「残像 -afterimage-」（いりや画廊、東京）
2025 個展「フレーム・枠」（ギャラリー由芽 / 東京）
2026 田中千鶴子・イワタルリ 二人展「熱と表現」
（川口市立アートギャラリー・アトリア / 埼玉）

細川 麻実子
HOSOKAWA Mamiko

「言ふ 言ふ」

だれかが目にしたとき、触れたとき、居るときに
「言ふ」の風景が生まれる。
そこに在る、人とモノ、音と風。反復する行為は、
やがて空間を変化させる。

振付・監修：細川麻実子
出演：ホシノメグミ、宮保恵、高橋純一、横田恵、
飯塚友浩、山城英里香、細川麻実子

身体表現
幼少期より加藤みや子に師事し、モダンダンスやダンスの創作を学ぶ。
ベルギー留学後、2001 年より舞台やアウトリーチ公演の企画、芸術祭等に参加。
2010 年より多ジャンルのアーティストや高齢者との共同創作等で作品を発表。
振付指導・ワークショップ講師・高齢者身体機能訓練士などその活動は多岐にわたる。
ベルギー映画祭にて Vincent Guilbert 監督映画 ”We’ll go down the abyss in silence” 最優秀ダンス賞受賞。

本多 真理子
HONDA Mariko

「そんなに長くなくそれほど短くもない ～管に聴け～」

素材：塩ビ管、設備材、粘土

坂の途中にある埼玉会館はまるで迷宮。
「入口はどこ？」「ここは何階？」「この奥にトイレ？」
そんな挑まれた屋内から外に出ると空が広い。
そしてエスプラナードは街を結ぶ、街に開かれた屋外広場。
前回取りあげたオノ・ヨーコ著「グレープフルーツジュース」に“地球が回る音を聴きなさい”との一節があった。
聴いてみたくなったのでそんな装置にしてみた。
管に耳をあててみてほしい、空の音なのか、自分の心臓の音なのか、女神のため息か、迷宮の裏庭とエスプラナードを繋いだ管に答えはある。きっと。

埼玉県生まれ　東京芸術大学大学院修了

最近の活動
2025. かがわやまなみ芸術祭 2025 / 香川
2025.「そんなに長くなくそれほど短くもない II」
TOKI Art Space / 東京
2025. エスプラナード展 / 埼玉
2024.「そんなに長くなくそれほど短くもない」
ぎゃらりー由芽 / 東京
2023. エスプラナード展 / 埼玉

松井 ローラ
MATSUI Lola

「いびつなかたち」

1976 年　京都府生まれ　神奈川県在住
【主な活動歴】
2024「日々」（Galerie SATELLITE　パリ）
2022「寄生虫眼鏡」（Galerie SATELLITE　パリ）
2022 埼玉会館エスプラナード展 2022
2020「外部寄生虫」（Galerie SATELLITE　パリ）
2019「外部寄生虫」（ 藍画廊　東京）
2018「鼓動のリズム」（ 藍画廊　東京）
2017「ローラの世界」（ 藍画廊　東京）

レモンを買った。 無農薬で育てられたというそれらの歪な形状は成長過程で虫に食われた部分をレモン自らが修復した跡だそうだ。
少し話が飛躍するかもしれないが、 もしその形状の整っていないレモンを人に例えるとするならば、 自分らしく在るためにあらゆる苦難を受け入れ、 それを自らの生命力で乗り越えた人と言えるかもしれない。
本作は、 たとえどんなに「いびつなかたち」になろうとも、 自分の軸をもって挑み続けようという前向きな気持ちを込めて制作した。
買ったレモンはジャムにして皮まで美味しく頂いた。 限りある人生、 そんなレモンのように全てを美味しく味わい尽くせるよう1日1日を大切に過ごしたい。

柳井 嗣雄
YANAI Tsuguo

「赤い記憶 – 終わりなき抗争」

素材：麻、染料

美術家 / 和紙造形
1978 年から 2 年間 Stanley W. Hayter に師事した後、版画家としてスタート。 1980 年代半ばに、 版画の支持体である「紙」そのものへの関心が高まり、 自ら紙漉きを手掛けるようになる。 紙素材および植物繊維を主体とした制作活動を継続している。

今回の作品「赤い記憶 – 終わりなき抗争」は、 真紅（ 血の色 ）に染めた麻繊維を使用。
紙漉き技法でシート状にしたものを幾重にも重ねてその断面を地層のように仕立てた。
世界の紛争地で流される血の層、 人間の戦争の歴史のようなものを暗示させた。

山本 麻世
YAMAMOTO Asayo

「すすぎわすれ」

素材：スポンジ、埼玉会館の陶製タイル・壁面
サイズ：可変

多摩美術大学工芸学科非常勤講師
ギャラリー川船で来年個展予定

硬くて冷たいタイルに、 柔らかく、 少しあたたかみのあるスポンジを挟んでみる。
そんな異なる質感の組み合わせから、この作品は始まりました。
埼玉会館の建築をつくる陶製のタイルとスポンジを合わせて

いるうちに、食器を洗うことや、台所で手を動かすことなど、毎日の家事の風景を思い出しました。
近くで見ると、タイルの隙間にスポンジが挟まっている。
少し離れて眺めると、 建物全体が大きな器のようにも見え、その表面に「すすぎわすれた何か」が残っているようにも感じられます。
小さな隙間を見るミクロな視点と、 建築全体を眺めるマクロな視点。 その二つを行き来しながら楽しんでもらえたらと思います。
この作品は、 みなさんが手を加えることで少しずつ変わっていく参加型の作品です。
気になる隙間を見つけたら、 ぜひスポンジをタイルの目地に差し込んだり、 すでにあるスポンジを動かしたりしてみてください。